

Obunsha's

COMPREHENSIVE

English-Japanese Dictionary

Obunsha's
COMPREHENSIVE
English-Japanese
Dictionary

旺文社
英和中辞典

監修者

高橋 源 次	明治学院大学名誉教授
小 川 芳 男	東京外国語大学名誉教授
五 島 忠 久	大阪大学名誉教授
平 井 正 穂	東京大学名誉教授

編集委員

鳥 居 次 好	明治学院大学名誉教授
広瀬 泰 三	東京外国語大学名誉教授
宮 部 菊 男	大阪大学名誉教授
福田陸太郎	東京大学名誉教授
桃 沢 力	中央大学教授

ま え が き

英語を学習し、理解するための基本的手段として英和辞典の果たす役割は大きい。そこには、英語という言葉に関する知識ばかりでなく、その背後にある事物に関する知識までもが、限られたスペースの中に盛りこまれている。英和辞典は、いわば外国語としての英語と外国の文物にアプローチするための知識の宝庫となるべき使命を負わされている。このような要請に応えるために、多くの先人たちはまさに骨身をけずる辛苦を重ねて、幾多の優れた辞典を編集してきたわけである。しかし、言葉は時代とともにたえず変化していく。先人たちの築き上げた業績にさらに新しい研究の成果が加えられねばならない。技術革新・情報化の時代を反映した新しい言葉と用法をも数多く収録していく必要がある。

本辞典の編集に際しては、われわれは監修者としての立場から、以上の点を特に留意したつもりである。すなわち、英語のあらゆる分野の言葉を可能な限り多く収めて英語に関する広汎な情報を提供するとともに、特に高校生・大学生が英語を学習する上で最も便利で信頼できる典拠となるよう編集に工夫をこらした。名詞の全語義に可算・不可算の別を示したこと、重要な動詞には用例と対応させて文型を示したこと、Usage欄・N.B.欄や*印で重要事項を詳しく解説したこと、類語欄で意味の似た語をまとめその微妙な差違を明快に解説したことなどは、学習者ばかりでなく研究者・実務者にとっても大いに役立つものと思う。また、わが国のおかれた国際環境を考慮して、いわゆるアメリカ英語を主体としながらも、イギリス英語も、その他の英語圏の英語も広く渉猟し、新語や口語・俗語、各種の専門語もつとめて多くを採録した。

顧みるに、この辞典の本格的な編集には7年の歳月を要した。そこにいたる準備の時期を加えると、これを遙かに倍することになる。その間、1960年代から70年代に引き継がれて、アメリカ・イギリスの言語学界では新しい優れた辞典・研究書が相次いで刊行されている。本辞典はこういった優れた辞典・研究書より計り知れない恩恵に浴している。原稿完成後も何回となく改稿し、さらに校正段階にいたっても最後まで内容的に正確で最新のものとする努力を怠らなかった。

幸い本辞典では、編集委員として学識豊かな鳥居次好、広瀬泰三、宮部菊男、福田陸太郎、桃沢力の諸氏をお迎えし、終始実際の推進力となって活躍していただいた。また、全編にわたって新語・新語義の補充と名詞の可算・不可算表示を担当された堀内克明氏、発音表記の荒磯芳行氏、文型表示の斎藤次郎氏、その他の重要記事を担当された稲見芳勝、永嶋大典、長谷川潔、吉田一彦の諸氏、すべての例文をチェックされた R. E. Freeman, V. E. Johnson, M. Blakeway, L. Seaman の諸氏、および執筆・校訂に献身的な努力をいただいた多くの方々の協力がなければ、このような完成をみることはできなかったことと思う。ここに心からの謝意を表する次第である。

監修者（代表）

高橋洋司

刊行にあたり

近年、国際的交流が盛んになるにつれて、国際語としての英語の果たす役割はますます重要なものになってきています。わが社では創業このかた英語教育を重視して、出版物・放送・機器等を通じて微力を尽くしてまいりました。特に英語学習の根幹をなす辞典については、1940年（昭和15年）に「エッセンシャル英和辞典」を世に出して以来、中学生・高校生を主な対象とした多くの辞典を刊行して、たえずその進歩改良に努めてまいりました。同時に私どもは、これら辞典を集大成して十分な語彙(5)を盛りこみ、高校生から大学生の英語学習のためにも、さらに英語研究者・実務者のためにも、広く利用できる本格的な総合英和辞典の刊行を計画して、準備を進めておりました。

しかしながら、辞典編集はまことに困難な事業でありまして、10余年を費やして漸く完成に近づいた原稿も、時代の変化とともに忽ちにして香気を失ってしまいます。ことに1960年代に入ると、英語学は以前にも増して飛躍的な発展をとげ、辞典編集にもそれらの成果を採り入れていく必要が痛感されるようになりました。一方、技術革新・情報化の波に乗って、新しい語句や用法が次々と生まれてまいります。これまでにあった言葉もあるものは廃語となり、またあるものには新しい意味・用法が加えられていきます。まことに言葉は生きて時代とともにたえず変化していくものです。

ここにおいて私どもは、新しい時代の要請に応えるべく、1968年（昭和43年）にいたって想を全く新たに、監修者にわが国の英語学界の重鎮であられる高橋源次、小川芳男、五島忠久、平井正徳の諸先生、また編集委員に学識豊かな鳥居次好、広瀬泰三、宮部菊男、福田陸太郎、桃沢力の諸先生をお迎えし、社の総力を結集して、この「旺文社英和中辞典」編集のスタートを切ったのであります。それ以来7年の歳月を費やしたのでありますが、その間、監修者・編集委員の諸先生を中心に、140余名にも及ぶ多くの執筆者・校訂者・専門校閲者の先生方の献身的なご努力によって、このように内容豊かで新鮮な辞典の誕生をみる事ができたのであります。

この辞典の収録語総数は約10万語で、時代を反映する新語・口語・俗語および科学用語なども豊富に採り入れ、この一冊で高度の学習性と実用性を完全に兼ね備えるように、以下のような種々の工夫をこらしてあります。

- (1) 学習する上で大切な語には十分なスペースをさいて重点編集を徹底した——特に重要な語には見出しに三段階の星標（☆印＝約1,500語…中学程度　★印＝約4,500語…高校程度　◎印＝約6,000語…大学教養程度）を付して学習の目安を与え、思いきったスペースをさいて語法・文法・文型その他の重要事項を徹底的に解説し、用例も充実させた。
- (2) つづり字は米国式を主とし英国式を併記、異形つづり字も多く収録した——見出しには米英によるつづり字の差を明示し、英国式を併記する形をとった。また、異形のつづり字もできるだけ多く入れて、どのつづり字がどの程度に使われるか、その区別が一目でわかるように大小の活字を使い分けて示した。

- (3) 発音は最も一般的な記号を用いて現代の米英音を幅広く収録した——発音は米音優先、英音併記の方式で、わが国の英語教育で最も一般的な記号を用いて現代の標準的な米英音を示すようにした。よく用いられる別発音もできる限り広く収録した。
- (4) すべての名詞語義に可算・不可算の別を明示した——学習する上で語義を確実に理解し、さらに冠詞や複数形をとりうるか否かなど用法をも把握できるように、㊦(=countable noun 可算名詞)、㊧(=uncountable noun 不可算名詞)の記号で区別を示した。
- (5) 重要動詞の文型、名詞・形容詞などのコロケーションを示した——重要な動詞にはすべて用例と対応させてわかりやすく文型を示した。その他、名詞・形容詞などのコロケーション(語と語の結びつき方)も一目でわかるように例文と併せて示した。
- (6) 詳細な Usage 欄・N.B. 欄を設けた——学習上特に重要な語には Usage(語法)欄・N.B.(注意・参考)欄を設けて、日本人の誤りやすい語法・文法や米英語の違い、口語・文語表現の別、背景知識など基礎から高度の事項までを詳しく解説した。なお、*印で注記を与えたものも数多い。
- (7) 親切な類語欄を設けて意味の似た語をまとめて解説した——訳語だけでは意味の微妙な差違がつかめない類語が数多くある。この欄では、こういったいくつかの語をまとめ、用例を示しながらその語のもつ語感や用法上注意すべき点を親切に解説した。相互参照(⇒)も活用した。
- (8) わかりやすく語源および他品詞形を示した——基本的な重要語、語源に興味のある語、語源を覚えておくに役に立つ語などにわかりやすく語源を示した。また、重要語には派生語や関連語をまとめて示し、語彙の拡大と関連把握が行えるよう工夫した。
- (9) さし絵・写真を豊富に掲げ、付録も学習と実務に役立つようにした——訳語だけでは理解の困難なものには図解・グループ図や写真を掲げた。付録も「英語の歴史」「英語のことわざ」「米英文化史年表」など役立つ記事が多い。
- (10) 組版・印刷・造本には最新の技術と資材を駆使し、見よく検索しやすくした——新鋳活字・特製辞典用紙をはじめ、検索を一層早める新能率見出し、収容量を増して見やすいワイドな版面構成など、最高の資材と最新の技術を駆使し、引きやすく、しかも長期の使用に耐えるよう配慮した。

以上のような諸特長を盛ったこの辞典は、必ずや愛用者の皆様のご期待に応えられるものと確信いたします。終わりに、この辞典の完成までの長い年月にわたって、編集・製作にご協力・ご援助を借しませんでした多くの方々の尊いご苦勞に対し、心から感謝を申し上げます。

旺文社社長

末尾好夫

編 集 ・ 執 筆 協 力 者

荒磯芳行	稲見芳勝	柏原信幸	斎藤次郎	沢村栄一
重田定正	竹内祐治	土屋吉正	豊田昌倫	永嶋大典
長谷川潔	堀内克明	宮畑一郎	安田和生	吉田一彦
R. E. Freeman	V. E. Johnson	M. Blakeway	L. Seaman	

青山富士夫	赤岩総雄	秋元実治	浅田荣治	生野摂子	石井 旭	石井勇三郎
石川京子	石川淑子	石沢千代吉	伊東銳治	乾 尚史	岩倉国浩	岩田昌山
岩月精三	梅原秀臣	江沢哲也	大石五雄	大木俊夫	大島良行	太田 浩
太田正信	大谷利彦	大沼雅彦	大橋敬一	大道末吉	岡田誠一	尾形隆夫
岡本 誠	奥津成子	長田光展	小原 昭	片岡政昭	片山武久	勝嶋利男
川福一弘	菊池弘毅	木村建夫	九頭見一士	久能成夫	久保内端郎	久保田泰夫
隈部直光	黒野 豊	後藤弘樹	斎田誠一	斎藤定吉	坂本守信	佐藤 匡
佐藤 弘	佐野柳策	下宮忠雄	社本雅信	塩沢利雄	重山依和男	篠田義明
下田弘之	鈴木絃治	鈴木 伸	鈴木保昭	諏訪秀隆	田井 孝	高木正枝
高橋富士男	高山誠太郎	高山利政	竹俣忠昭	田島敏雄	田代幸造	堅川吉英
田中曜子	田中安行	田部 滋	千種門爾	辻正次郎	土屋順子	常松正雄
寺崎唯良	富永道夫	鳥居国雄	中 秀男	中尾俊夫	中原道喜	中山修敬
西村清巳	仁平有孝	羽田陽子	馬場 彰	馬場 寛	平田 博	広野威志
福島 治	藤原 博	藤原 稔	布施敏夫	保永美和子	堀口俊一	本田和也
本多 学	横川正巳	益田京子	松下美都留	松永 巖	松野和彦	松本 等
森 忠雄	守屋貞男	八木 優	山口喜佐夫	山崎真稔	山下知子	山本達雄
山本利治	吉沢 貞	吉田武士	吉村 功		<カット>	四本文雄

主 要 参 考 文 献

- Gove, P. B. et al., *Webster's Third New International Dictionary of the English Language*, with Addenda. Springfield, 1966.
- Stein, J. et al., *The Random House Dictionary of the English Language*. New York, 1966. College edition. New York, 1968.
- Guralnik, D. B. et al., *Webster's New World Dictionary of the American Language*. Second College edition. New York & Cleveland, 1970.
- Woolf, H.B. et al., *Webster's New Collegiate Dictionary*. 7th edn. 1963, 8th edn. 1973, Springfield.
- Morris, W., *The American Heritage Dictionary of the English Language*. New York, 1969.
- Murray, J. A. H. et al., *The Oxford English Dictionary*. 12 vols. Oxford, 1884-1928. Supplement, 1933. Supplement, 1972.
- Fowler, H. W. & F. G., *The Concise Oxford Dictionary of Current English*. 5th edn. Oxford, 1964.
- Fowler, F. G. & H. W., *The Pocket Oxford Dictionary of Current English*. 5th edn. Oxford, 1969.
- Hornby, A. S. et al., *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Oxford, 1974.
- Garmonsway, G. N. & Simpson, J., *The Penguin English Dictionary*. 2nd edn. Harmondsworth, Middlesex, 1971.
- Wyld, H. C., *The Universal Dictionary of the English Language*. London, 1952.
- Barnhart, C. L. et al., *A Dictionary of New English*. London, 1973.
- Fowler, H. W., *A Dictionary of Modern English Usage*. Oxford, 1965.
- Evans, B. & C., *A Dictionary of Contemporary American Usage*. New York, 1957.
- Partridge, E., *A Dictionary of Slang and Unconventional English*. 2 vols. 6th edn. London, 1967.
- Wentworth, H. & Flexner, S. B., *Dictionary of American Slang*. New York, 1967.
- Jones, D., *Everyman's English Pronouncing Dictionary*. 13th edn. London, 1967.
- Kenyon, J. S. & Knott, T. A., *A Pronouncing Dictionary of American English*. Springfield, 1953.
- Lewis, J. W., *A Concise Pronouncing Dictionary of British and American English*. London, 1972.
- Brewer's *Dictionary of Phrase and Fable*. Revised edn. London, 1970.
- Onions, C. T. et al., *The Oxford Dictionary of English Etymology*. Oxford, 1966.
- Jespersen, O., *A Modern English Grammar*. 7 vols. London & Copenhagen, 1909-49.
- Quirk, R. et al., *A Grammar of Contemporary English*. London, 1973.

凡

例

【1】見 出 し

- 収 録 語 1-1 この辞典には普通の英語のほか、固有名詞、接頭・接尾辞、連結形、短縮形、略語、連語、変化形および常用外来語なども広く見出しとして収録した。
- 字 体 1-2 一般の英語はすべて太字の立体活字を用い、まだ十分英語化していない外来語は太字の斜体活字を用いて区別した。
- 配 列 **school**¹ [sku:l] *n.*一般の英語
- 星 標 表 示 **mo-dus** [móudəs] *n.*外 来 語
- 1-3 配列はすべてアルファベット順とした。
- 1-4 特に重要な見出しには三段階の星標を付けて学習上の目安とした。
- : 最重要語 (中 学 程 度)
- : 次位重要語 (高 校 程 度)
- ・ 三位重要語 (大学教養程度)
- 語 源 の 1-5 同一つづりでも語源の異なる語は原則として別見出しとし、右肩に^{1,2}の記
- 異 なる 語 号を付けて区別した。
- 分 節 1-6 分節は原則として音声学の原理に基づき、中丸[・]によって示した。
- 2種類以上の分節法が認められるときは、最初に掲げた発音に準じた。
- variant 1-7 同一語で2種類以上のつづり (variant) がある場合は、以下の原則に従って示した。
- a) 使用度が同等のときは、一方を音節単位で省略して併記した。
- won-der-strick-en** [wándərstrík(ə)n], **-struck** [-strʌk] *adj.*
- この場合両者の発音が同じであれば、発音はあとに一括して示した。
- draft, draught** [draɪft/draʊt] *n.*
- b) 使用度が低いものは () に包んで発音のあとに示した。
- dem-o-crat-ic** [déməkrætík], (**dem-o-crat-i-cal** [-ik(ə)l]) *adj.*
- c) 米英でつづりが異なる場合は米式つづりを優先して掲げ、次に《英》として英式つづりを併記した。必要なときは英式つづりを別に掲げた。
- la-bor**, 《英》**-bour** [léibər] *n.*
- la-bour** [léibər] *n., v.* 《英》=labor
- d) 特定の品詞・語義に限って使用度が同等の別つづりがある場合は、品詞記号、語義番号のあとに (=...) で示した。
- eaves-drop** [...] *vi., vt.* —*n.* (=eaves-drip [...])
- 連 語 1-8 2語以上に分けてつづられる語 (連語) も見出しとしたが、
- a) 同義の連語は最も使用度の高いものを掲げ、他は () 内に併記した。
- accòmmodátion bill** (**dráft, nôte, pàper**) *n.*
- b) 省略できる部分は [] に包んで示した。
- United Státes** [of América] *n. pl.* (the ~)

【2】発

音

⇒ 発音解説 (p. 9)

- 発 音 記 号 2-1 発音は最新の資料に基づき、国際音声記号 (International Phonetic Alphabet) を用いて見出し直後の [] 内に示した。⇒ 発音記号表 (表見返し)
- ア ク セ ン ト 2-2 アクセントは直上式とし、第1アクセント (primary accent) は [ˈ], 第2アクセント (secondary accent) は [ˈ] で示した。
- 省 略 2-3 同一語に2種類以上の発音がある場合は [ˌ] で区切って併記し、共通部分は [-] で省略して示した。
- space-man** [spéismæn, -mæn] *n.*

- 2-4 発音の違いがアクセントの位置の違いだけによるものは次のように示した。
mi·grate [maɪgreɪt /-ɪ-] *vi.*
- 米音と英音 2-5 米英で発音が異なる場合は米音を優先し [米音 / 英音] として示した。
ab·do·men [æbdəmən, æbdou-/æbdəmən, æbdoumen] *n.*
- 2-6 米英共通音のほかに米英いずれかで行われる発音は次のように示した。
mouthed [maʊðd, +米 mauθt] *adj.*
- 特 殊 音 2-7 特殊用法での発音は次のように示した。
south·east [sauθi:st, 海 sau:st] *n.*
- 品詞・語義 2-8 品詞・語義によって発音が異なる場合は次のように示した。
 による違い **reb·el** [rébl →v.] *n.* むほん人…… — *vi.* [ribél] **1** むほんを起こす
house·wife *n.* **1** [háuswaif →2] 主婦…… **2** [háɪf] 針箱
- 2-9 省略できる音は () に包んで示した。
am·bi·tion [æmbɪf(ə)n] *n.* ⑩
- 強音と弱音 2-10 強音と弱音があるものは次のように示した。
at [強 æt, 弱 ət] *prep.*
- 連 語 の 2-11 連語見出し (⇒1-8) においては、連語としてのアクセントを見出し語の上に
 アクセント 直接アクセント記号を付けて示した。
sýstems èngiñèring *n.* ⑩ システム工学
 ただし別見出しとして掲げてない語がふくまれる場合はその語の発音とアクセントを示した。
báck·sèat driver [bæksɪt:] *n.* おせっかいやき

【3】品 詞 と 語 形 変 化

- 品 詞 3-1 品詞名は原則として発音記号のあと、または — の直後に略号で示した。
 ⇒記号・略語表(裏見返し)
- 3-2 文法上特に説明を要する語には、品詞記号のあとに《定冠詞》《関係代名詞》《疑問副詞》《叙述形容詞》などとして示した。
- 3-3 名詞・動詞・形容詞・副詞の変化形のうち、不規則変化をするもの、変化形が2種類以上あるものについては品詞記号のあとの () 内に示した。
 名詞の複数形は (*pl.* ……) として示したが、動詞は (過去形, 過去分詞形, 現在分詞形) の順で示し、形容詞・副詞は (比較級, 最上級) の順で示した。
- 変 化 形 表 示 **child** [tʃaɪld] *n.* (*pl.* **chil·dren**)
trav·el [træv(ə)] *v.* (-eled, -el·ing; 《英》-elled, -el·ling)
far [fɑ:r] *adv.* (**far·ther**, **far·thest**; **fur·ther**, **fur·thest**)
- 3-4 規則変化に属するものでも特に次の変化形は示した。
- a) 語尾の子音が重複する語: **stop** […] *v.* (**stopped**, **stop·ping**)
big […] *adj.* (**big·ger**, **big·gest**)
 - b) 語尾の -e が脱落する語: **a·buse** […] *v.* (**a·bused**, **a·bus·ing**)
large […] *adj.* (**larg·er**, **larg·est**)
 - c) 語尾の -y が -i に変わる語: **cit·y** […] *n.* (*pl.* **cit·ies**)
bur·y […] *v.* (**bur·ied**, **bur·y·ing**)
pret·ty […] *adj.* (**-ti·er**, **-ti·est**)
 - d) 語尾の -c が -ck に変わる語: **pic·nic** […] *v.* (**-nicked**, **nick·ing**)
 - e) 語尾が -o, -f, -fe の語: **po·ta·to** […] *n.* (*pl.* **-toes**)
 - f) 語尾以外が変化する語: **sis·ter·in·law** […] (*pl.* **sis·ters-**)
 - g) 発音上注意を要する語: **house** […] *n.* (*pl.* **hous·es** [háuzɪz])
cloth […] *n.* (*pl.* **cloths** [klɒθs, klɒðz])
- 3-5 代名詞には必要な変化形を示した。
I [aɪ] *pron.* 《人称代名詞, 1人称・単数・主格》(*pl.* **we**; 所有格 **my**, 目的格 **me**, 所有代名詞 **mine**)

【4】語 義 ・ 語 法

- 語義の配列 4-1 語義の配列は原則として使用頻度順とした。
- 語義の分類 4-2 多義にわたるときは、品詞ごとに **1, 2, 3, …** を用いて分類した。
1, 2, 3, … を更に細分するときは **a), b), c), …** を用いて分類した。また必要に応じて **I, II, III, …** を用いて大分類した語もある。
- 訳語の併記 4-3 訳語を併記する場合、同種の訳語の間は [,] で区切り、やや大きく区分するときは [;] で区切った。
- 特別な用法 4-4 見出し語の特別な用法は () 内に次のように示した。
(~s) (~es) (-ies), etc. 常に複数形で用いる
(the ~) 常に定冠詞をつけて用いる
(a ~) (an ~) 常に不定冠詞をつけて用いる
(B-), etc. 常に大文字で始める
このほかに (the ~s), (the B-s) などのような複合形もある。
また、「通例、しばしば、ときに」などを適宜前置した。
- ㊦ と ㊧ 4-5 名詞の可算 (countable), 不可算 (uncountable) は ㊦ ㊧ の記号を用いて示した。⇒可算語と不可算語 (p. 11)
a) 原則として ㊧ および場合によって ㊧ にも ㊦ にもなるもののみに示した。
b) 大部分の語義が ㊧ であるときは、最初に ㊧ を掲げて代表させ、㊦ を個々に示した。
- 言語用法 4-6 見出し語またはある語義の使用される地域・分野・時代などが限定される場合は ㊦ 内に通例略語で示した。⇒記号・略語表 (裏見返し)
ap·ple [...] *n.* **1** りんご… **4** (米俗) 大都市; 地球… **5** (米口) 奴(♂), 男
また、その他の簡単な文法的・語法的指示も ㊦ 内に《単複両様扱い》《再帰用法》《通例受身形で》《叙述用法》《限定用法》などとして示した。
- 百科用語と専門語 4-7 百科用語、専門語は ㊦ 内に略語で示した。
factor [...] *n.* **1** …… **2** 《数》因数, 因子…… **4** 《生》遺伝子
- 4-8 訳語にはできるだけ補足的説明、敷衍(ふえん)的説明を加えて訳語の明確を期した。これらは [] 内に示した。
i·den·ti·fy [...] *vt.* **1** [同一物・本人であると]…を認める, 確認する
Di·an·a [...] *n.* **1** …… **2** 《ローマ神話》ダイアナ[月の女神で、処女性と狩猟の守護神; ギリシア神話の Artemis に当たる]
- 他動詞の訳語 4-9 他動詞の訳語には「…を, …に, …から」などを付けて目的語との関係を明確に示した。また特定の目的語をとる場合は [] に包んで具体的に示した。
lead¹ [...] *vt.* **1** …を導く, 案内する, 連れて行く(来る) ……
5 [道などが][人]を導く, 連れて行く
- 反意語と参照語 4-10 同意語、反解語は () 内に示した。
4-11 反意語は *opp.* ……として示し、参照すべき語は *cf.* ……として示した。
as·cent [...] *n.* ㊦ ㊧ **1** 昇ること, 上昇 *opp.* *descent*
com·par·a·tive [...] *adj.* … **3** 比較級の *cf.* *positive, superlative*
- 4-12 見出し語と密接に結びついて用いられる重要な前置詞・副詞は訳語のあとに ㊦ に包んで示した。
con·sist [...] *vi.* **1** [部分・要素から]成る…… 《*of*…》
shut [...] *vt.* **1** [窓・戸など]を締める, 閉じる…… 《*…up*》
- 入れ替えと省略 4-13 スペースの節約のため、語句を () や [] に包んだ。
a) () 内の語句は直前の語句との入れ替えを示す。
b) (or ……) とある語句は直前の語句と入れ替えても意味が変わらない。
c) [] 内の語句は省略可能であることを示す。
- 4-14 語法・類語・参考、注意事項などは欄を設けて詳説した。
a) **Usage** 欄ではその語の語法・機能などを解説した。
- Usage

【要項】

N. B.

(* ……)

- b) 【要項】欄では同類語をまとめて比較解説した。
 c) N.B. 欄ではその語に関連した参考事項、注意事項などを解説した。
 d) これらの欄に該当する事項のうち、比較的簡単な内容のものについては (* ……) として適宜訳語中で解説した。

【5】 用 例

- 用 例 5-1 用例は各品詞・語義ごとに『』を掲げて訳語のあとに示した。
 5-2 見出し相当部分および、重要な関連語句は斜体を用いた。また、ことわざおよび聖書、文学作品などからの引用は全体を斜体で示した。
time […] n. 1 ⑩ 時, 時間; 日時, 歲月 『time and space 時間と空間 / Time creeps on. 時が知らない間にたつ / Time is money. (ことわざ) 時は金なり / Time flies like an arrow. (ことわざ) 光陰矢のごとし
 5-3 用例が列記されるときは一般の語では / で区切ったが、動詞型、名詞型、形容詞型などに関係する場合はその型ごとに用例の前後を // で区切った。

【6】 文 型

- 動 詞 文 型 6-1 動詞には文型 (Sentence Pattern) 的配慮を施した。⇒文型解説 (p. 13)
 6-2 動詞の用例はすべて文型に基づいて分類し、文型の異なる用例間は // で区切った。
 6-3 重要動詞では各用例の前に〔 〕内に文型を示した。⇒文型一覧(表見返し)
 6-4 文型上重要な前置詞、副詞、接続詞などは用例中では斜体を用いた。
 名 詞 型 と 6-5 名詞、形容詞の用例においても、動詞の文型に準じて用例の分類を行い密接
 形 容 詞 型 に結びつく前置詞、副詞などの語は斜体を用いた。

【7】 熟 語 ・ 成 句

- 字 体 7-1 熟語・成句は太字の斜体で各品詞の最後にまとめて示した。
 配 列 7-2 配列はすべて単語単位でのアルファベット順とした。ただし句頭の冠詞は配列上無視した。
 7-3 一つの熟語・成句は検索上最も手掛かりとなる見出し語の中で扱った。
 7-4 語義分類は、① ② ③ ……で行った。
 自・他 の 7-5 動詞句が他動詞的に用いられるか自動詞的に用いられるかまぎらわしい場
 区 別 合は (vt.) (vi.) の記号をつけて明示した。

【8】 他 品 詞 形 ・ 派 生 語

- 他 品 詞 型 8-1 重要語には関連して覚えておくべき語を ◇ のあとにまとめて示した。
 派 生 語 8-2 重要な派生語は見出しとしたが、それ以外のものは基本となる語の語義・用例のあとに示した。見出しとの共通部分は ~ や - で省略して示した。

【9】 語 源 ・ 出 典

- 語 源 9-1 語源は見出しの最後に [< ……] の形で示した。⇒語源解説 (p. 16)
 出 典 9-2 出典は各語義、用例のあとに [← マタイ (Matt.) 16:18…] のように示した。

【10】 付 録

この辞典の利用度を高め、さらに学習・実務にも役立つように、次の解説および参考記事を付録として巻末に掲げた。

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| (1) 英語の歴史……………2070 | (6) 米英年中行事……………2098 |
| (2) 英語のことわざ……………2076 | (7) 米英文化史年表……………2100 |
| (3) 英語参考図……………2089 | (8) 不規則動詞変化形一覧……………2106 |
| (4) 英国の新州名一覧……………2094 | (9) 度量衡換算表……………2110 |
| (5) 重要接頭・接尾辞……………2095 | |

発音解説

本辞典の発音表記では、先ず米音を示し、斜線で区切り、次に英音を示した。ここで言う米音とは、米国本土の中西部 (the Middle West) とする広大な地域で聞かれる音(2)を基礎としたもので、「一般米語」(General American)と呼ばれるものである。また英音とは、英国ロンドンを中心とした英国南部の教養ある人々によって話され、英国放送協会(BBC)のアナウンサーからも聞かれるもので、一般に受け入れられた音、「容認音」(Received Pronunciation)と呼ばれるものである。米音も英音も(また日本語も)話すときの「様式」(style)により発音も異なってくるが、本辞典の表記は、「ゆっくりした口語体」(slower colloquial style)に基礎を置いている。表記に際して使用されている記号は、国際音声協会(International Phonetic Association)の記号である。

1. 母音と子音

喉(2)から出てくる有声音のうち、口の中の何物にもさえぎられないで自由に出てくるものを母音と言い、音が舌や唇などで一時閉鎖されるとか通路がせまめられて摩擦の音を生じたりする音を子音と言う。

1) 母音

a) 母音の長短 日本語では、母音の長さは重大な意味を持つが(「小野」と「大野」)、英語の場合には長短(quantify)は、日本語のような決定的な意味を持たない。(特に米語においてそうである。)英語において決定的なのは質(quality)である。英語の場合、「eat」[i:t]の[i:]と「it」の[i]の差は主として質によるものである。他の母音についてもまた二重・三重母音についてもこれは保たれる。(ただ本辞典の場合、[æ]と[a], [ɛ:]と[e]については、長短は質(quality)の変化を伴わない。他については、当該箇所を参照のこと。)

b) 純母音 (注意を要する母音のみ)

[a] アクセントのない位置に現れるあいまいな音。「ウ」と聞こえることもあり、「ア」に近くなることもある: today [tədeɪ], about [əbaʊt], China [tʃaɪnə]

[A] 米音では、[a]を強くしたものの。「オ」の気味の「ア」。英音ではもっと前寄りで、「ア」と思っよう: under [ʌndə], cut [kʌt], done [dʌn]

[i] 「イ」と「エ」の中間音。日本人学習者に最も誤解される音の一つ。[i:] (大体「イー」)を短くしたものではない。「東北地方」にこの音が聞かれる: ink [ɪŋk], miss [mɪs], till [tɪl]

behind [bɪhaɪnd], careless [keərlɪs] のようなアクセントのない [i] は [a] に近づく。また一方 money [mʌni], city [sɪti], study [stʌdi] のごとく語尾のアクセントのない [i] は、米音では狭い [i:] となることが多い。一方英音では、逆に広い [e] に近づくことが多い。

[æ] 「エ」と「ア」の中間音。「エ」より「ア」に近い方がよい。顎(2)を落とすことがコツ: add [æd],

sat [sæt], marry [mæri], ask [æsk/ɑ:sk]

bad [bæd] の [æ] は bat [bæt] の [æ] より長い。

[ɑ:] 普通の「ア」ではなく、舌はずっと低く、奥まっっている。喉の検査のときの「アー」: father [fɑ:ðə], calm [kɑ:m]

[ɑ/ɔ] hot, bomb などの「o」では、米音では、前述の [ɑ:] の [ɑ] を用い、英音では、[ɑ] に唇の低味を加えた [ɔ] を用いる。[ɔ] は「オ」でなく、低い奥まった「オ」で、[ɑ] に近いことに注意: odd [ɒd/ɔd], doctor [dɒktə/ɔdktə], college [kɒlɪdʒ/kɒlɪdʒ]

[ɔ:] 山などで遠方の人に大声で呼びかけるときの「オー」に近い。米音では [ɑ:] に近くなることもあり、英音では普通狭く、唇を丸めて発音され、「オー」に近い: all [ɔ:l], bought [bɔ:t], saw [sɔ:]

[u:] 「ウ」より唇の丸い [u] に更に口の丸味を加え、前に突き出す。rude [ru:d], cool [ku:l], shoe [ʃu:]

[ə] 米音としては、二記号で表されるが、一つの純母音と見なす方が理解し易い。すなわち、つづりに「r」があり、英音で [ə] であるとき、米音でこの音となる。[ə] の口構えをして、舌先を硬口蓋の方に反転させるか、舌全体を後に引くかして作る。[ə] の記号で表すこともある: perhaps [pə'hæps], modern [mɒdərən/mɒdən]

[ɜ:] 米音としては、[ər] を強く長目に発したものの。[ɜ:] の記号で表すこともある。英音では、母音が続かない限り [ɜ:] : urge [ɜ:rdʒ], shirt [ʃɜ:t], occur [ə'kɜ:]。ただし、hurry [hʌri/hʌri] の場合もある。colonel はつづりに「r」がないが、米音では [kɜ:nl(ə)]。

c) 二重母音 複数の母音記号を並べて表すが、実際には一音節の音であって、前の母音から後の母音の方向へ移動するもの。すなわち、[ai] は [a] を強く発して、[i] の方向へ移動して行くもの。(日本語の「アイ」(愛)は、「ア」と「イ」という独立した音が並列されたもの。)便宜上、高い [i], [u] に向かう「上向き二重母音」と中音 [ɜ:] (= [ə]) (米), [ə] (英) に向かう「中向き二重母音」とに分類する。

イ) 上向き二重母音 (注意を要するもののみ)

[ou] 米音の [o] は「オ」でよい。英音の第1要素は [a] を強く発したものになることが多い。またアクセントの無い音節では、速度の早い会話の場合、[u] への動きが少なく、[o] (英音では [ə]) にとどまることもある。さらに早くなれば、米音でも弱い [ə] になる: oat [out], post [poust], though [ðou]; omit [o(u)mit], obey [o(u)beɪ]

[ɔi] 実用的には、英音・米音ともだいたい米音の [ɔ:] の位置から [i] の方向に移動する: oyster [ɔɪstə], broil [brɔɪl], boy [bɔɪ]

ロ) 中向き二重母音

[iəɹ] 米音では [i] から [əɹ] (すなわち [ə]) に、英音では [ə] に向かう二重母音: ear [iəɹ], fierce [fiəɹs], spear [spiəɹ]

[iəɹ] の次に母音のくる場合、米音では、[ə] の要素が弱まったり消失したりする。本辞典の米音表記 [i:ɹ] は、[i] あるいはそれをそのまま伸ばした音と言う意味。すなわち「イ」や「イー」より開いた音: era [i:ɹə], serious [si:ɹiəs/siəriəs], material [məti:ɹiəl/mətiəriəl]

[eəɹ] 第一要素は [e] や「エ」より開いた音、米音では [əɹ] (= [ə]) へ、英音では [ə] へ移る: air [eəɹ], scarce [skeəɹs], bear [beəɹ]

[eəɹ] に母音が続く場合、米音では、[ə] の要素が弱まったり消失したりする。本辞典の米音表記 [e:ɹ] は第一要素は、[e:] でも [e] でもよいという意味: airy [é:ɹi/éəri], Mary [mé:ɹi/méəri], parent [pé:ɹənt/péərənt]

[a:ɹ] 実際は米音では、[a:] から [əɹ] (= [ə]) に向かう二重母音。英音では母音が続くとき以外は [a:] arm [a:ɹm], farm [fa:ɹm], far [fa:ɹ]

[ɔ:ɹ] 米音では [ɔ:] から [əɹ] (= [ə]) へ、英音では通常純母音の [ɔ:]。ただし、この [ɔ:] は、米音の場合、前出の純母音 [ɔ:] よりやや狭い: order [ɔ:ɹdər], short [ʃɔ:ɹt], war [wɔ:ɹ]

[o:ɹ] 米音では [ou] の第一要素から [əɹ] (= [ə]) に向かう。すなわち [ɔ:] より狭く「オー」に近い。英音では常に上記の [ɔ:]。しかし、米音でも常に [ɔ:] と発音してもよい: oar [o:ɹ または ɔ:ɹ], mourn [mo:ɹn または mɔ:ɹn/mɔ:n], hoarse [ho:ɹs または hɔ:ɹs/hɔ:s] (or [ɔ:ɹ], morn [mɔ:ɹn], horse [hɔ:ɹs]—[ɔ:ɹ] の発音はない—と比較せよ)

[uəɹ] 米音では [u] から [əɹ] (= [ə]) へ。英音では [u] から [ə] へ: poor [puəɹ], cure [kjəɹ]

[uəɹ] に母音が続く場合、米音では「ə」の要素が弱まったり消失したりする。この場合 [u:] は [u] かそれをそのまま伸ばしたもの。狭い [u:] は不可: plural [plú:(ɹ)əl/plúəɹəl], tourist [tú:(ɹ)ist/túəɹist], curable [kjú:(ɹ)əbl/kjúəɹəbl]

ハ) 二重母音 +əɹ

[aiəɹ], [auəɹ] 最初の要素が強く、他の二つが弱い三個の母音 (すなわち [əɹ] を一音と見なすが並ぶ場合、一音節と見て三重母音と言うことがある。しかし二重母音プラス [əɹ] (= [ə]) と見ること多い: fire [fa:ɹ], tire [ta:ɹ]; flour [flauəɹ], hour [auəɹ]。(英音では [aiə] [aə] [a:] となり、[auə] は [aə] [a:] となることが多い)

2) 子音 (注意を要するもの)

[p], [t], [k], [tʃ] と気音 アクセントのある母音が続く時、気音 (aspirate) を伴う。すなわち軽い [h] 音が聞かれる。これがないと、それらの音の有声音と間違えて聞かれることがある: pay [pei:]-bay [bei], tie [tai]-die [dai], kill [kil]-gill [gil], chill [ʃil]-Jill [dʒil]

[t], [d] それぞれ「タ」「テ」「ト」, 「ダ」「デ」「ド」の子音に近いが、日本語の [t], [d] は舌先が、歯

茎でなく、もっと前方に出て歯の裏にくる。英語の場合、舌先は歯茎まで引かれ、さらに日本音より接触面も少ない。その結果、英語音は日本音より鋭い感じである。two [tu:] は「ツー」、team [ti:m] は「チーム」のごとく響くことがある。

米音 [t] 標準的な [t] は舌先を歯茎に接触させて破裂させて作るが、米音では、アクセントのある母音とアクセントのない母音にはさまれた [t] は歯茎との接触時間が短く、また接触の程度も弱い。その結果、日本語の「ラ」行の子音のように発せられる。pitty が「ピリー」、better が「ペラー」、water が「ワラー」のごとくに聞こえることが多い。また [t] の直前に [n] があるとき、この現象の影響で [t] は明確に聞こえない場合がある。すなわち center が「セナー」、twenty が「トゥエニー」のようになる。

[ɹ] 英音・米音とも舌先は歯茎に近づくが、米音は [əɹ] (= [ə:]) の位置から次の母音の位置に向かって移動するときに生ずる一種の「わたり音」(glide) と解される。英音も摩擦は少ないが、米音はさらに少なく、母音の響きを持つ。[h] や [w] と共に半母音に分類される。従って、stirrer は英音では [stɪ:ɹə] であるが、米音では [stə:ə] のようになる。本辞典では [stɪ:ɹəɹ]。

斜体 r について 米音の大きな特徴の一つは、語末または子音の直前に r のつづりがあるときは、その直前の母音に「r」の色づけ (r-coloring) をすることである。これは母音を発音する際に舌先を巻き上げるか、舌全体を奥に引くかすることである。その結果、その母音は全体または末尾が独特なうろ (hollow) な音色を呈する。

2. 強形・弱形 英文を読む際、明確な意義内容を持つ語 (content word) は強く読まれるが、冠詞・人称代名詞・助動詞・前置詞・接続詞などは弱く発音されることが多い。実際に、英音の方が強形よりはるかに多く使用される: the [特に強調するとき ði:, 子音の前 ðə, 母音の前 ði], their [強 ðeəɹ, 弱 ðəɹ], can [強 kæn, 弱 kə(ə)n], at [強 æt, 弱 ət], than [強 ðæn, 弱 ðə(ə)n]

3. 外国音

[y] 舌を [i] の位置にして唇を [u] のように丸めて発音する: *compte rendu* [—/F kɔ̃t rədy]

[œ] 舌を [e] の位置にして唇を [ə] のように丸めて発音する: *siffleur* [F siflœ:r]

[ø] 舌を [e] の位置にして唇を [o] のように丸めて発音する: *jeu* [F ʒø]

[x] 後舌面と軟口蓋の間の摩擦によってつくられる音。日本語の「ハ」に近い: Bach [ba:k/G bax]

[ç] 中舌面を硬口蓋に近づけてできる摩擦音。日本語の「ヒ」に近い: *Reich* [—/G raɪç]

[ŋ] [n] の音を鼻音化してできる音: Bretagne [F brətaɲ]

[~] フランス語の母音の上につけて鼻音化を示す。[ã, ê, ɔ]

(荒磯 芳行)

可算語と不可算語

1. ㊦ ㊧ のもつ意味

㊦—countable (可算語)

㊧—uncountable (不可算語)

この辞典では、可算用法のみの名詞には㊦を省略し、不可算用法の名詞や語義に㊧をつけた。同一語で㊦、㊧の両用法があるものは、語義別に㊧のみを表示した。ただし、語義区分の一部分に可算用法が含まれるときは㊦の表示をした。似た語義で、㊦と㊧の両様がある場合には、㊦または㊧㊦㊧というように併記した。それぞれ前に置いたほうが頻度が高いことを示している。しかし、㊦㊦とあっても、㊦と㊦が同程度に用いられる場合もあり、統計的に確かめられた厳密な表示ではなく、概略を示すものである。

㊦、㊧は英作文の際に役立つだけではなく、名詞の語義内容を明らかにする働きもしている。これによって、訳語だけではわからない質的な言葉の語感がつまみやすくなる。たとえば、laugh ㊦とlaughter ㊧の差は、訳語だけでは十分に示すことができない。また pornography ㊧に対してporno-graphy という可算名詞が必要なわけも理解できる。

㊦、㊧の表示は、辞典によってやや違った方針でつけられていることがある。本書では、単数のときはa またはan がつき、複数のときは-s がつくという形態上の基準によって、㊦、㊧の区別をした。

a ~/-s がつくもの……㊦

a ~/-s がつかないもの……㊧

もちろん、ten sheep のように単複同形の場合には-s がつかなくても㊦と考える。(数詞がつくことは㊦の基準になる。) なかには、a (an) がついていても-s がつかないもの(たとえばliking, modicum, calm)がある。この類は、必要に応じて(通例a ~) または(通例単数のみ) というような表示をした。また、㊦の名詞で、-s のつく形がもっぱら使われるもの(theatrical, tear など)もある。これらは(～s) または(通例～s) などの表示をした。

なお、㊧の名詞でもknowledgeのように、ときにa を伴うものがある。また、waters (海・川・湖などの多量の水、海、水域、鉱泉水) は対応するa water の形がないが、このように㊧の名詞が特定の語義では、-s を伴うことがある。これらは(a ~) または(またa ~) あるいは(～s) または(また～s) の表示をした。この場合はa (an) や-s がついていても考えられる名詞である。要するに、a (an) がついていても対応する-s 形がないものは㊧であり、-s がついていても、対応するa (an) つきの形がないものも㊧である。したがって㊧(またa ~) とか㊧(また～s) という表示は矛盾していない。

2. 連語とイディオム中の名詞

㊦の名詞でも、慣用的な表現では、冠詞がつかないばかりの形が使われるため、一見㊧のような感

じになる。これは可算名詞が特定なものをさす代わりに、一般化した抽象的な素材として不可算名詞に近い性質を帯びるものと考えられる。たとえば、go to school/ in port/ by car などがある。ただし、英米で差異のある場合もあり、go to university/ in hospital という英国英語は、米国ではgo to a (or the) university/ in a (or the) hospital という通常の㊦の形になる。㊦の名詞が㊧のような形をとるのはこのほか、from... to... という句や列記の場合、主格補語に使われる場合などがあるが、これらは㊧とは別のものであり、文法上の現象として説明されなければならない。㊦㊦の表示はこのように点で立ち入ることはできない。したがって、㊦の用例のなかにたまに無冠詞単数の例があっても、矛盾しているとは限らない。

3. 絶対的ではない㊦㊧

㊦、㊧の区別は絶対的なものではない。理論的には、すべての名詞が㊦、㊧の両方になる可能性もっている。たとえば、Webster's Third New International Dictionary では、furniture や butter を含む大部分の名詞に-s の形が示されている。学問的に厳密な意味では、名詞に㊦、㊧の表示をすることは不可能であるといえてよいが、㊦、㊧が傾向を示すものと考えれば、実用上は認めてもさしつかえない。ことに、名詞の数の使い分けがうまくできない日本人にとっては、㊦、㊧の表示がきわめて有益であることは疑いをいれない。

この辞書の㊦、㊧は、一応の目安を示したものであるが、頻度の低い語や語義については、正確な判断がしにくい場合も少なくなかった。表示にあたっては、用例のほか、英語を母国語とするインフォーマントの意見を参考にしたが、細部については、今後さらに調査をくり返して、より正確なものにしたい。全体的に見て、㊧が主で、たまに㊦があるような場合には、実用性を考慮して、表示を㊧だけに簡略化した例が少なくない。さもないと、ほとんどの名詞が㊦㊦という表示になってしまつて、英作文などの実用上の目的に利用できなくなるからである。しかし、㊦、㊦別の語義の細かい区分が困難な場合や、㊦、㊦それぞれの頻度が高い場合には、㊦㊦または㊦㊦と併記した。この場合は㊦㊦は㊦が多いことを示し、㊦㊦は㊦が多いことを示すが、同程度に用いられる場合もあり、厳密なものではないことは1で述べたとおりである。また、訳語が同一であつて、㊦は「…すること」に相当し、㊦は「…する行為」に相当する場合もある。この場合には使用度とは関係なく㊦㊦としてある。

4. ㊦性と㊦性

すべての名詞は㊦性と㊦性を備えていて、その大小によって、現実の用法が決まってくる。㊦は広がりをもつ名詞だが、それが何かによって制限され

たり(たとえば形容語句がついたり), 特定のものをさすと感じられるときには, ㊦性を帯びて, a や -s をつけることがある。たとえば, equipment や fun は ㊦性が強いが, ときには前者は -s を伴い後者は a を伴うことがある。これに対して pen や street は ㊦性が強いが, たまに ㊦的に用いることもある。この中間にはさまざまな度合で ㊦性と ㊦性をもった各種の名詞が存在している。この辞典では, それを便宜的に語義区分と訳語によって, ㊦(原則として無表示), ㊦, ㊦㊦, ㊦㊦㊦などに簡略化して示しているわけである。

さらにまた, ㊦, ㊦㊦は固定化しているものではなく, 時代とともに, ほぼ同じ語義でも ㊦, ㊦㊦が変化している例が少なくない。最近の例では, television は, ㊦であるが, しだいに television set をさす ㊦の用法が生まれて, We have two televisions. と言うことが可能になっている。しかし, この ㊦の用法にまだ違和感をもっていて, これを認めない人もいる。マリファナ(たばこ)をさす pot にしても, 今日は ㊦で, smoke pot と言うのが普通であるが, それから前では smoke a pot が使われていた。㊦, ㊦㊦はその名詞に固有の性質として定まっているのではなく, 慣用的な傾向として表れるもので, 発音や語法などと同じく変化するものなのである。

5. 名詞の種類によって

しかし, ㊦, ㊦㊦は外界の分割の仕方という大きな語義に関連しているので, 一定の仲間が一定の傾向を示すことも普通である。たとえば, 動植物の名は, ㊦が原則であるが, 動物では, 肉や毛皮をさすときは ㊦の扱いになる。また, 獵物になる魚やけだものは, 集合的に単複同形で扱われる傾向があるが, これは ㊦に近づいている。植物も原則は ㊦であるが, それから得られる草根本皮や香料は ㊦になる。また, fern (しだ) や moss (こけ) のようなものは, しばしば, 個体を問題にしないで, 全体的な広がりとして, ㊦の扱いになる。もつと高等な草花でも, しばしば ㊦として無冠詞単数が用いられることがあるが, bacterium, germ, virus のように微生物では, 個体を考えて, むしろ ㊦が普通である。この辞典では動植物は ㊦の用法が著しいもの以外は, ㊦として扱っている。

病名は, tonsillitis, influenza のように学術的なものは原則として ㊦であるが, 通俗的な病名は headache や cold のように ㊦ともなり, [the] flu や [the] measles のように the や -s のつく特定形になるものもある。

スポーツやゲームの名は ㊦が普通であるが, marbles のように, 複数タイプの ㊦も多い。

鳴き声や擬声・擬態語の類は ㊦が原則であり, 本書では ㊦扱いであるが, noise や sound が ㊦㊦両様になると似て, ㊦的になることもある。なお, good-bye のようなあいさつ語は ㊦であるが, しばしば一見 ㊦のような使い方になる。これは呼びかけ語の場合も同様で, 無冠詞単数形でも ㊦とは性質が異なる。

色を表す名詞は, 原則としては ㊦であるが, 種類や変化を示して ㊦になることも普通である。たとえば a moss green のように, 不定冠詞を伴う例は少なくない。

語形上から ㊦, ㊦㊦がほぼ推定できる場合も多い。たとえば, 動詞が名詞に転換された steal, buy のような語は ㊦が原則であり, takeoff, walkaway のように「動詞+副詞」の名詞転換形も ㊦が原則である。ただし, 後者ではときどき ㊦の用法も見られる。本書では著しい ㊦用法のあるとき以外は ㊦の扱いにしてある。

語尾から ㊦, ㊦㊦をある程度判断することもできる。たとえば, -wear, -ware は ㊦が原則である。また, -land, -dom は ㊦, ㊦両様の可能性があり, -hood, -ship, -cy, -ance, -ence, -ency, -ic, -ness, -th などは ㊦が普通であるが, ときに ㊦になることもある。-ty は語によって ㊦や ㊦㊦になる。-age も意味内容によって ㊦, ㊦の両方がある。-tion, -ment, -ing, -ism は ㊦, ㊦の両様になりやすい。-sis, -tomy は ㊦が多いが, ときに ㊦にもなる。以上は抽象名詞のほとんどすべてが ㊦㊦両性をもつことを示している。

6. 特別な ㊦と ㊦㊦

物質名詞の類は ㊦が原則であるが, two chalks, two cheeses, two hairs のように特定の形をしていてすぐに数えられる範囲のものは ㊦にもなる。

量的な ㊦の名詞が a や -s をつけて ㊦性を帯びることがある。たとえば, jams and jellies of Hawaiian fruits はその例である。しかし, butter や honey はこのような種類の ㊦になりにくい。coffees (多種類のコーヒー) と口語の two coffees (2杯のコーヒー) は同じものではなく, 前者は特殊な ㊦で, 後者は普通の ㊦と考えられる。また, vitamin, colloid, hormone などは, 種類が常に考えられるので ㊦が原則である。oxide, acid などの ㊦扱いも同様であるが, 特定の化合物に用いれば ㊦になる。上記のような種類を表す ㊦の多くは普通の可算名詞の ㊦と異なって準 ㊦と考えられる。

集合名詞には ㊦扱いのものが多い。たとえば crowd や family は, 単数でも意味内容が複数といふだけのことで, 文法上の用い方は ㊦である。衆多名詞(複数性集合名詞) cattle, police, people のように一見単数形でも数詞のつくものは, 一種の複数形と考えられ ㊦に準じる。これに対して company (客), life (生物) などのように数詞のつかない単数性集合名詞は ㊦である。

常に複数形の clothes, trousers など一種の ㊦と考えられるが, 本書ではこれを pl. とだけ表示した。最後に, the を伴う名詞は ㊦, ㊦が問題にならなくなるが, これは特定化が起こるためである。本書では (the ~) でこれを示した。㊦の名詞に the がつくと, a や -s をつけることができなくなり, 事実上は ㊦に近づくわけである。なお, 固有名詞の類は, 通例は ㊦, ㊦の枠外にあるが, 類似物や種類をさすと ㊦になり得る。(堀内 克明)

文 型 解 説

本辞典では29の動詞型(Verb Pattern)を設定しているが、動詞型1(完全自動詞)と動詞型9(完全他動詞)の2型は表示を省いてある。従って本辞典で実際に用いた動詞型記号は27個である。

1. 《 》

動詞型1は動詞型2および動詞型6,7以外の完全自動詞を示す。本辞典では特に必要がある場合を除いては、動詞型1を表示していない。従って自動詞で特に文型表示がなければ、それは動詞型1に属する動詞という意味である。[例] *Birds fly.* / *Day dawns.* / *He died.* / *The rain lasted* all day.

2. 《～+副》

この場合の副とは、副詞一般をさすのではなく、動詞と密接に結び付く副詞的小詞(Adverbial Particle)および一定の自動的に慣用的に結び付いて使われる少数の副詞をさす。副詞的小詞とは in, out, on, off, down, up, about, across, around, along, over, through, by, past, under など前置詞と同形のものほか、away, back, forth などの語をいう。[例] *He came in (out).* / *Prices are going up (down).* / *He went back (away).* / *I came home.* / *The book fell off.* / *His book is selling well.*

3. 《～+補》

この型の補は主格補語(Subjective Complement)を表し、用いられる動詞は不完全自動詞である。主格補語には名詞および形容詞とそれらの相当語句が来る。この型に用いられる主な動詞には次のようなものがある。be, look, seem, appear, feel, smell, sound, taste, become, get, grow, turn, come, go, fall, run, keep, remain. [例] *This is my car.* / *She looks happy.* / *He felt hungry.* / *His dreams have come true.* / *He remained poor* all his life.

4. 《～+to be 補》 《～+[to be] 補》

この型は自動詞が①必ず to be を伴うものと② to be が省かれるものとの二つから成る。補語になる叙述形容詞が afraid, asleep, awake などのときは to be を省くことができないので①の型を取る。この型に用いられる主な動詞は seem, appear, happen, chance, prove, turn out などである。[例] ① *He seems to be asleep (awake).* / *I happened (chanced) to be out* when she called. ② *He seems [to be] angry.* / *The street appeared [to be] deserted.* / *The report proved [to be] false.*

5. 《～+as 補》

as 補とは as によって導かれる一種の主格補語をさす。as のあとには資格・地位・職能・役目などを表す名詞が来る。[例] *Mr. Brown acted as chairman.* / *He died as president.* / *She served as an assistant.*

6. 《～+副+副》

自動詞がその次に前置詞とその目的語である名詞あるいは名詞相当語句を伴うときの動詞型である。副+副は①場所を表す副詞句のときと、②自動詞と

意味上密接に結び付いて全体で慣用的な句を形成し、動詞によって使用される前置詞が一定しているものである。後者の場合、自動詞と前置詞の結合がほとんど他動詞に近いものもある。[例] ① *He looked out of the window.* / *Our school stands on a hill.* ② *The house belongs to him.* / *Can I count on your help?* / *Please don't wait for me.* / *We looked into (=investigated) the matter.*

7. 《～+副+副+to do》

この型は6の《～+副+副》に to 付き不定詞の伴ったものである。厳密に言えば6の一種であるが、本辞典では学習者の便宜を考えて独立の動詞型として扱ってある。「名詞+不定詞」全体が前置詞の目的語をなすものが多く、名詞は不定詞の意味上の主語をなしている。[例] *I am waiting for him to arrive.* / *They have arranged for a taxi to meet you at the airport.* / *We are counting on you to help.*

8. 《～+done》

この型は3の《～+補》の一種で、補語の中で特に過去分詞を取る場合の型を示したものである。“done”は自動詞の主格補語に相当する。[例] *He remained undisturbed.* / *I wish the lid would stay put.* / *He stood amazed.* / *The knot came untied.*

9. 《～+目的語》

目的語をさす。この動詞型では動詞は完全他動詞であって目的語以外の他の要素は必要でない。他動詞が目的語を取ることは定義により自明のことであるから、本辞典では必要のある場合を除いてはこの動詞型の表示は省いてある。またこの動詞型および以下の他動詞を含む動詞型の受動態については、本辞典では能動態を建て前とし、受動態はその運用形とみなしてすべて能動態で表示してある。[例] *I like sports.* / *He painted the picture.* / *He sells flowers.* / *Please describe what you saw.* / *This picture was painted in 1820.*

10. 《～+副+副》

この型は2の《～+副》に対応するもので、その他動詞形とも言える。副詞は動詞と密接に結び付く副詞的小詞が主であるが、ほかに他動詞と慣用的に結び付いて使われる若干の副詞をも含む。目的語が名詞の場合、副詞的小詞は目的語に先立ち動詞の直後に置かれることがある。また目的語が長い場合も副詞的小詞は動詞の直後に置かれることが多い。目的語が人称代名詞の場合は、副詞は必ず目的語の後に置かれる。[例] *He put his coat on.* / *He put it on.* / *Don't throw the shoes away.* / *Don't throw them away.* / *Carry the baggage upstairs.* / *Carry it upstairs.* / *He put on his hat.* / *Don't throw away anything useful.* / *Bring in those chairs that are in the garden.* / *I took her home.*

11. 《～+ing》

この動詞型の-ing は①自動詞の次に置かれて一

種の補語の役目をする現在分詞と、②他動詞の目的語である動名詞の二つに分けられる。①は動詞型8《～+done》と同種のもの、8が動詞の次に来る語が過去分詞であるのに対し、この型ではそれが現在分詞であるという点のみの相違である。この場合の自動詞は必ずしも不完全自動詞であるとは限らず、後に続く現在分詞の「…しながら」「…して」という意味を表し、動詞と同時的な動作を表すこともある。②の他動詞の中には目的語として動名詞のほか、to 付き不定詞を取るものもある（その場合は動詞型12になる）。[例] ① *He stood listening to the music./ I sat watching television./ He came running to meet us.* ② *He's stopped smoking./ She avoided meeting him./ Boys like playing baseball./ We must prevent their coming.*

12. 《～+to do》

この動詞型には、①動詞が自動詞で to do がその補語または副詞的修飾語をなすものと、②動詞が他動詞で to do がその目的語をなすものと二つがある。①の to do は目的・結果などのほか種々の意味関係を表す。[例] ① *His ambition is to become a doctor./ We are to meet at the airport./ We happened to meet on the street./ We stopped to rest.* ② *I want to see you./ I forgot to mail your letters./ I'd like to go to the movies.*

13. 《～+to do》

この動詞型は目的語と目的補語として to 付き不定詞に従えるものである。このうち動詞が思考・判断などを表し、目的語と to 付き不定詞との間に意味上主語と述語の関係があるものは、to 付き不定詞が to be となるものが多く、これは本辞典では別型として扱っている（⇒動詞型16）。[例] *I told him to wait./ Please allow me to go home./ He doesn't want his son to become an artist./ We expect him to come to tea.*

14. 《～+to do+補》

この型の動詞は主に不完全他動詞で、目的補語を伴うものである。目的補語には名詞または名詞相当語句、および形容詞または形容詞相当語句が用いられ、動詞の表す動作の結果や同時的な状態などを表す。[例] *We call him Teddy./ They elected him president./ He pushed the door open./ He made her happy./ I found the chair quite comfortable.*

15. 《～+to do+as 補》

この型は目的補語が as に導かれる語句の場合である。as の後には名詞または名詞相当語句、および形容詞または形容詞相当語句が来る。The idea strikes me as silly. は外形的にはこの動詞型に属するように見えるが、as 以下は目的補語ではなく、主語に対する同格的叙述語をなし特例である。[例] *We regard it as a waste of time./ They elected him as chairman./ Don't treat him as a child./ I will describe him as really clever.*

16. 《～+to do+to be 補》《～+to do+[to be] 補》

この型は不定詞が to be であることを除けば、動詞型13と同じものである。この型の動詞は思考・判断などを表し、目的語と to be 補との間には意味上

主語と述語の関係が成り立つ。動詞によっては to be を省くことができるものがあり、それらは《～+to do》[補] で表示される。to be を省いた場合は動詞型14と同じになる。口語では動詞型16に代わって動詞型20が好まれる。[例] *They felt the plan to be unwise./ He declared himself to be a member of the Communist Party./ We know him to have been a spy./ They reported him [to be] the best doctor in town./ We think him [to be] a good teacher.*

17. 《～+to do》

do は原形不定詞を表す。この型で用いられる動詞は①知覚動詞と②使役動詞とに分けられ、原形不定詞はこれらの動詞の目的補語に当たる。動詞型17に用いられる主な動詞には、① see, hear, feel, watch, observe, notice, ② make, let, bid, have などがある。使役動詞的ではないがアメリカでは help をこの動詞型に用いる（イギリスでは動詞型13となる）。[例] ① *I saw him cross the street./ We felt the ground shake./ Did you notice anyone leave the building?* ② *What makes you think so?/ I'll let you know it./ He has his secretary type his letters.*

18. 《～+to do+ing》

この型における -ing は現在分詞で、目的補語として用いられている。この型で用いられる動詞は動詞型17の①と共通のものほか、smell, find, catch, keep, leave, have, set, start などがある。なお、この型の -ing には動名詞として目的格の名詞や人称代名詞以外の名詞を意味上の主語とする用法も含まれる。これに用いられる主な動詞は like, hate, mind, imagine, fancy, remember, understand などである。[例] *I saw him crossing the street./ I heard her playing the piano./ I can smell something burning./ I can't keep him waiting./ I caught him napping./ This set me thinking./ I don't understand him behaving like that./ I remember my father coming home late.*

19. 《～+to do+done》

done は過去分詞を表す。この型では過去分詞は目的補語として用いられ、一般に目的語と間に受身の関係が成り立つ。この型に用いられる主な動詞は feel, hear, see, find, like, make, want, wish, get, have などである。[例] *I heard my name called./ He made himself understood./ I want this report typed./ He got his radio fixed./ She had her purse stolen.*

20. 《～+that 節》《～+[that] 節》

that 節は接続詞 that に導かれる名詞節で、この型の文では①他動詞の目的語となっているもの、②《～+to do+to be 補》の型で用いられる自動詞の中のあるものが前置詞を介さずに直接 that 節を伴うもの、③ it seems (or appears) that... または it happened (or chanced) that ... などの形式がある。また口語では think, suppose, hope, wish, say などのような日常よく用いられる動詞の後では that が省かれることが多いが、それは《～+[that] 節》で表示してある。[例] ① *I think [that] he is an honest man./*

He *wishes* he had studied harder./ I *suggested* that he buy a new car./ He *said* [that] he would send his son to college.// ② He *insisted* that he was innocent. (cf. He *insisted* on his innocence.)/ She *complained* that it was too hot. (cf. She *complained* of the heat.)// ③ It *seems* that he is fond of sweets./ It *happened* that he was busy when I called.

21. 《～＋国＋that 節》

この動詞型には ① 目的語が間接目的語で that 節が直接目的語に当たるものと、② that 節が動詞型 28 《～＋国＋副＋国》の 副＋国 に相当するものの二つが含まれる。この型に用いられる主な動詞には ① show, teach, tell, promise, ② assure, convince, inform, remind, satisfy, warn などがある。[例] ① Experience has *taught* me that honesty pays./ He *promised* me that he would be home for dinner.// ② They *warned* us that the roads were icy. (cf. They *warned* us of the icy roads.)/ He *informed* us that he was willing to help. (cf. He *informed* us of his willingness to help.)

22. 《～＋wh. to do》

wh. は主として wh. で始まる疑問代名詞と疑問副詞 (how を含む) および従属接続詞の whether をさす。ただし動詞型 22 では why は用いられない。この動詞型では wh. to do は名詞句をなし、動詞の目的語となっている。[例] We could not *decide* what to do./ I don't know how to play chess.

23. 《～＋国＋wh. to do》

動詞型 22 の wh. to do の前に 国 が置かれた形で、主として 国 は間接目的語に、wh. to do は直接目的語に相当する。この動詞型に用いられる主な動詞は動詞型 25 と共通で、本来動詞型 28 《～＋国＋副＋国》で用いられる動詞もこれに含まれ、advise, ask, inform, show, tell などである。[例] Ask him where to put it./ I *showed* her how to do it./ Please *inform* me where to get them.

24. 《～＋wh. 節》

この動詞型では wh. 節は他動詞の目的語に当たり、wh.-words には動詞型 22 で使用される語のほかに、疑問副詞の why と従属接続詞の if (=whether) が含まれる。ただし He *meant* what he said. のような文では what は関係代名詞に導かれる従節で、動詞型 9 に属する。[例] He *asked* why I was late./ I *wonder* whether he will come./ Do you *know* if he is at home today?

25. 《～＋国＋wh. 節》

動詞型 23 の wh. to do の代わりに wh.-words で導かれる従節が用いられている点を除けば動詞型 23 と同じである。主として 国 は間接目的語に、wh. 節は直接目的語に当たる。[例] Ask him where she lives./ Can you *tell* me how high the mountain is?/ Please *inform* me whether this train stops at Atami.

26. 《～＋国＋国》

最初の 国 は間接目的語、2 番目の 国 は直接目的語である。間接目的語は主に人を表し、直接目的語

は主に物を表す。間接目的語が強調されるとき、あるいは長いときは文の均整上、直接目的語が先行し、間接目的語は to または for のあとに置かれ動詞型 28 になる。受動態ではどちらの目的語も主語になりうるが、いずれか一方しか許されないものもある。[例] I *gave* him a watch./ I don't *owe* him anything./ Will you *buy* me some stamps?/ She *made* herself a new dress./ She *poured* me a cup of coffee.

27. 《～＋国＋副＋国》

最初の 国 は間接目的語、次の 国 は直接目的語として用いられている。この動詞型では副詞または副詞の小詞は動詞と意味上密接に関連して両者で慣用的な句をなし、間接目的語としての名詞または代名詞はその間に置かれる。その場合直接目的語の位置は常に副詞のあとである。直接目的語の位置を前に移すと、《～＋(直) 国＋副＋副＋国》または《～＋副＋(直) 国＋副＋国》の型になる。《～＋国＋国＋副》または《～＋副＋国＋国》にはならない。前置詞を用いる型では動詞により to または for が用いられる。[例] Please *bring* me back those books. (= Please *bring* back those books to me.)/ They *gave* the people back their freedom./ He *made* me up a parcel of books. (= He *made* up a parcel of books for me.)

28. 《～＋国＋副＋国》

この動詞型には ① 副＋国 が意味上動詞と密接に関連して慣用的な語群を形成し、動詞によって結び付く前置詞が常に一定しているもの、② 前置詞は主に to または for に限られ、国 は動詞型 26 《～＋国＋国》の間接目的語に当たるもの、③ 副＋国 が場所・方向・期間などの意味を表す副詞句のものが含まれる。② に用いられる動詞は動詞型 26 と同じである。前置詞 for を取る主な動詞は buy, choose, get, save, make, grow, find, do, cook, leave, order, play, reach, prepare などである。[例] ① I *congratulated* him on his success./ I *explained* the problem to him./ He *reminds* me of his father.// ② He *sold* his old car to one of his friends./ She *made* coffee for all of us.// ③ Don't *stick* your head out of the car window./ He *took* his children to the park.

29. 《～＋国＋国＋that 節》

この型では that 節は動詞の直接目的語に、副＋国 は間接目的語に当たる。動詞型 21 と異なり間接目的語は必ず 副＋国 で表される。副＋国 は動詞の直後、that 節の前に置かれ、前置詞には to が用いられる。この型で用いられる主な動詞には admit, complain, confess, explain, remark, say, suggest などがある。なお間接語法の伝達動詞としては say to a person that ... よりも tell a person that ... の方が普通である。[例] He *explained* to us that he had been delayed by the weather./ He *suggested* to John and Mary that they go to Spain for their holidays.

(斎藤 次郎)